埋蔵文化財発掘調査報告書

亀泉町薬師塚古墳

1973. 3 .30

前橋市教育委員会

亀泉町土地改良区

ま　え　が　き

近来、団地造成、道路構築が極めて盛んである。滄桑の変ということがあるが、山を遷すぐらいは容易なことである。ブルトーザーやパワーシャベルの後を追いかけると、必ず古墳の１つや２つは消えているし、遺跡地は破壊されている。

篦や移植コテで掘る自分を顧みると、竹槍で強がりをいった過去を思いだして苦笑せざるをえない。文化財保護法もザル法になり、一文化財保護担当が血眼になっても、文化財の保護は後手になって、一目も二目も相手の目になってしまう。

文化財保護法では、埋蔵文化財といって、掘りだされた土器類や古墳の副葬品についての規定が主となっている。この「物」は警察に届出て厳重な管理を要求される。ところがその埋蔵物があった土地については、はっきりした規定がない。遺跡は遺物以上に重要であり、その保存・保護には、より以上の注意が必要である。「物が出なければよい」といった考え方は、その土地の歴史（人間の生活遺構）を滅ぼし失っていくことになる。そのために、細かな記録を上の層からも、石の組み方からも学びとっていかなければならない。

古代人が生活した最も確実な資料が永久に葬り去られてしまうのは忍びない。再び調査しえないからである。文献にのみに依存した歴史から、土くれの中に如実に人間の生活の跡を辿ることによって更に新しい歴史を知ることができる。

亀泉町の土地改良事業は新しい亀泉町の歴史を掘り当てたといっていい。既にいくつかの歴史の跡は滅びさったが、幸い土地改良課ならびに亀泉土地改良区理事長の川野鬼子松氏はじめ、大山氏、関氏、土地所有者の善意から、薬師塚が調査し終えた。調査方法、期日など物足らないことがあったがブルトーザーで跡形もなくなる以前に記録しえたことに感謝したい。

願わくば復元し、保存できることを願ってやまない。

昭和 48 年 3 月 30 日　　社会教育係長　阿久津　宗　二

亀泉町薬師寺古墳（上毛古墳綜覧）発掘調査概報

記載漏れ

所　　在：群馬県前橋市亀泉町字西前原 209 番地内（70 ㎡）　所有者　柴崎重司

調査期日：昭和 48 年 3 月 1 日～3 月 20 日

調 査 者：前橋市教育委員会社会教育係長　阿久津宗二

土地改良課職員 4 名　富沢吉昭　布施鋲司　永見信国　榎田和夫

明治大学学生　石井敦子

調査経緯：　亀泉町土地改良区が、土地改良に伴い道路の拡幅、土地改良事業の一環として篠、樹木の伐採を行った結果、古墳と認知したものである。従来薬師（石仏）を祀ってあり、頂上部に夫婦松があった。撤去して亀泉霊園までの側道（上電縁線）構築に支障があることから教育委員会に調査依頼（2 月 5 日）してきたので緊急調査を実施したものである。

立　　地：　亀泉町（中亀）地内、上毛電鉄の南側にあたり、寺沢川の右岸段丘にあたる。寺沢川の氾濫による段丘と自然丘上に営まれた小円墳である。標高約 100.2m赤城南麓の南端、全体的には、旧利根の段丘でもある。上泉町、堀之下町に至る古墳群の一古墳である。

　真南には堀の下に正円寺古墳が見おろせる位置である。県道前橋大胡線を大胡に至る前橋病院の西を南へ約 150m南下したところに所在する。寺沢川に沿った田園への傾斜地にあたるため南は斜面がなだらかであり、斜面上に築構したようである。

外部形式：　封土の形式は円墳である。北は道路で削りとられ、その一部は宅地（斎藤宅）にまで及んでいる。南は斜面となり、既掘の跡か原形を失っている。現状において径約 20m、傾斜地であるため南北は約 25mで小型なものである。

　薬師像の安置してあったところから南は一段低く削りとられたとみられる。

葺石は頂上部より約 4 mまでは認められず、西端より 4 mをぐるりと葺いていたようである。封土の原型は西側において割合によく保たれていた。

　周湟は認めがたいが、西側において約 1 m50 ㎝の土砂の埋もれがみられた。斜面利用のため西及び北の土砂を盛りあげたように見受けられた。

　埴輪は見当たらなかったが石室上に須恵器の大甕一個分（口縁部経約 45 ㎝？）の出土をみた。つまり頂上部に大甕をすえ頂点より約半径 4 mには石を葺かず、それより約 3 m80～ 4 mにわたって葺石がめぐっている状態であった。葺石根石から径約 18m高さ 3.50mの小古墳と確かめられた。

内部構造：　内部は横穴式袖無型石室と認められた。石室開口部では羨道部の天井石及び西壁の崩壊がひどく確認が困難をきわめたので、北側奥壁の裏込め部分より調査し、玄室を確認した。天井石は奥壁より二枚が現状であったが、それより南は西壁と共に石室内に落下していた。

天井石を撤去した結果、石室は袖無型であった。石室内は西壁の石の落下と土砂でほとんど埋まっていた。石を撤去した結果、玄室と羨道部の間に梱石を認めることができた。

玄室の全長 2.35m、奥壁での下幅 1.10m、梱石との下幅 0.90mで杓形をなしており、奥壁の部分の高さ 1.50mであった。

壁面の転びはほとんど見られなかったが、西壁が石室底部よりずっており梱石部分より南はほとんど崩れておった。火山活動による震動の影響であろうか。

石材は安山岩の自然石で平面の石を選んでその面をだしたようである。羨道部の填塞の状態は破壊がひどく確認できなかったが、側壁の根石の部分が推測して全長 5.20m余と考えられる。

なお石室の裏込石の状態は小石と白粘土で固めてあり竪穴式石室を思わせる構築方法がとられていた。

石室は奥壁の部分において石室幅 1.10mの両側に裏込め 1.50mがあり、石室構築の総幅は約 4m10 ㎝になる。

なお石室構築に当っては地盤(ローム褐色土)を約 70 ㎝切り取り、基礎石を組み、白粘土でかため、壁を築いている。

石室床面には 10 ㎝内外の自然石（転石）をはりその下に約 2～5 ㎝の河原石を敷きつめてあった。その厚さは約 15 ㎝で青白の石であった。遺物はその間に出土したがヒゲ根がはびこり遺物をほとんど破壊していた。梱石は幅 20 ㎝深さ 50 ㎝長 100 ㎝であった。

出 土 品：(遺物、副葬品等)

イ．封土中　須恵器大甕、須恵器碗（頂上部より）
　　その他（石器、縄文土器、石皿１個）

ロ．石室内　副葬品
- 直刀……４振
- 刀子……１個
- 耳環……６個（大４、小２）
- 管玉……２個
- 小玉……10 個
- 鉄鏃……無柄５個
- 鉄鏃……有柄約 30 本

} 玄室内

- 馬具（轡、留め金具）　羨道内

これらは遺物調査計測が完了していないので後報としたい。

石室内の遺物の配置状況は図面のとおりであるが、中央稍々奥へよったところに集中しており、直刀は奥壁に沿って一振、西壁に沿って一振、梱石に沿って二振の計四振、有柄の鏃は西壁奥壁西隅に集中していた。

奥壁より 60 ㎝の点で径 50 ㎝に骨粉・小玉・耳環、西壁に沿って奥壁より 50 ㎝の地点に管玉と小耳環が出土した。

玄室中央部にはほとんど遺物は認められなかった。

馬具は梱石より南へ 1.20ｍの地点で東壁に沿って出土した。

遺物の内容から遺体は三体ではなかったろうか。特に耳環の出土位置、骨粉の出土状態、遺物の配列から推測するものであるが再考を免れない。

以上亀泉町薬師塚古墳の発掘調査の概報を述べたのであるが、その特徴を記すと

１．斜面上に基盤を掘りこんで構築した円墳である。

２．袖無型の横穴式石室で自然石積みである。

３．直刀が４振出土していて鍔をもっている。

４．石室床には転石が敷かれている。

５．葺石が全面になく周囲のみである。

６．頂上部より古式の須恵器の大甕が出土している。

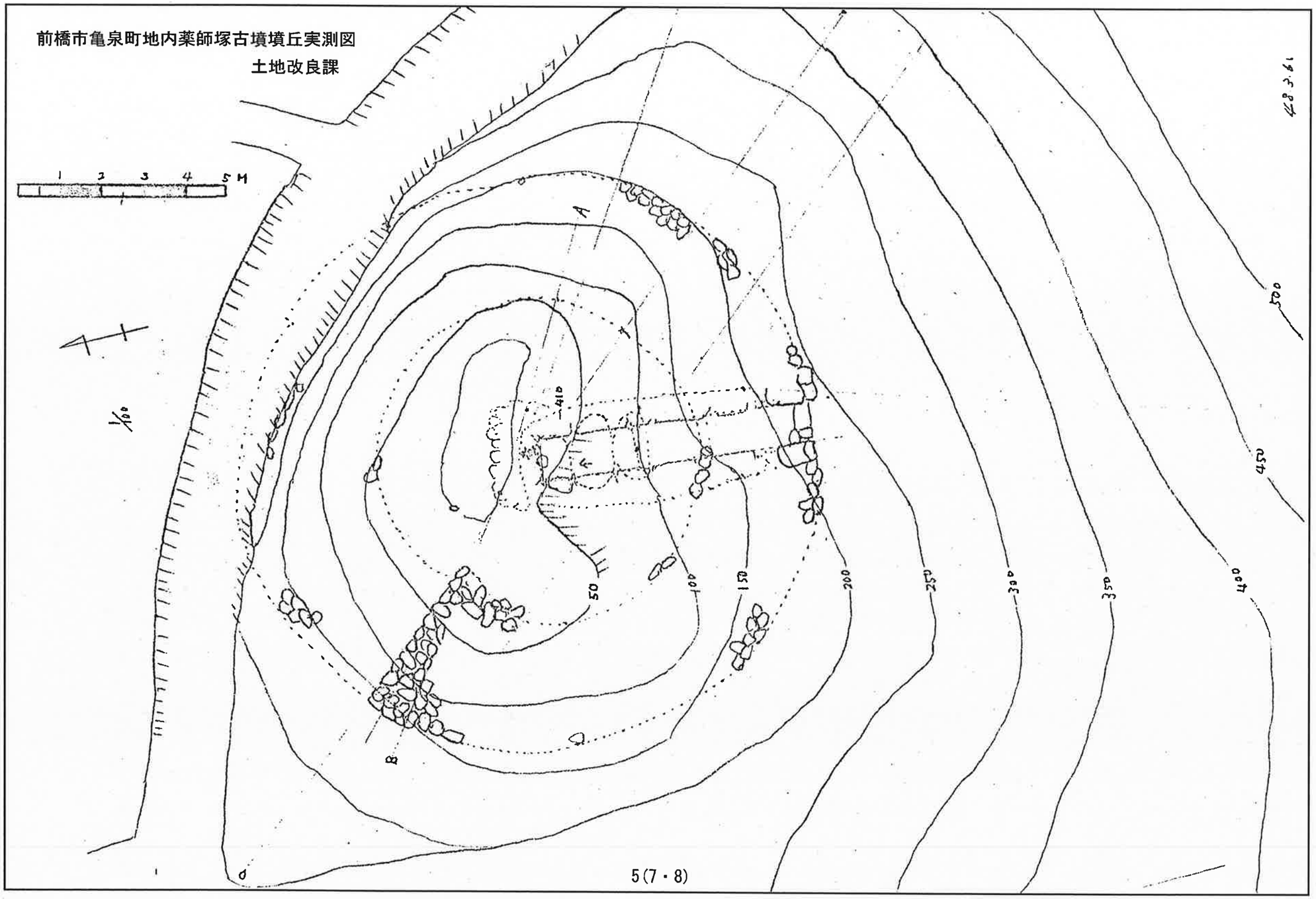
等である。石室の形は古墳時代後期の初め頃のものと考えられ、封土構築の状態、石室の西壁の崩壊、須恵器の出土等から推測して６世紀頃の古墳ではないだろうか。

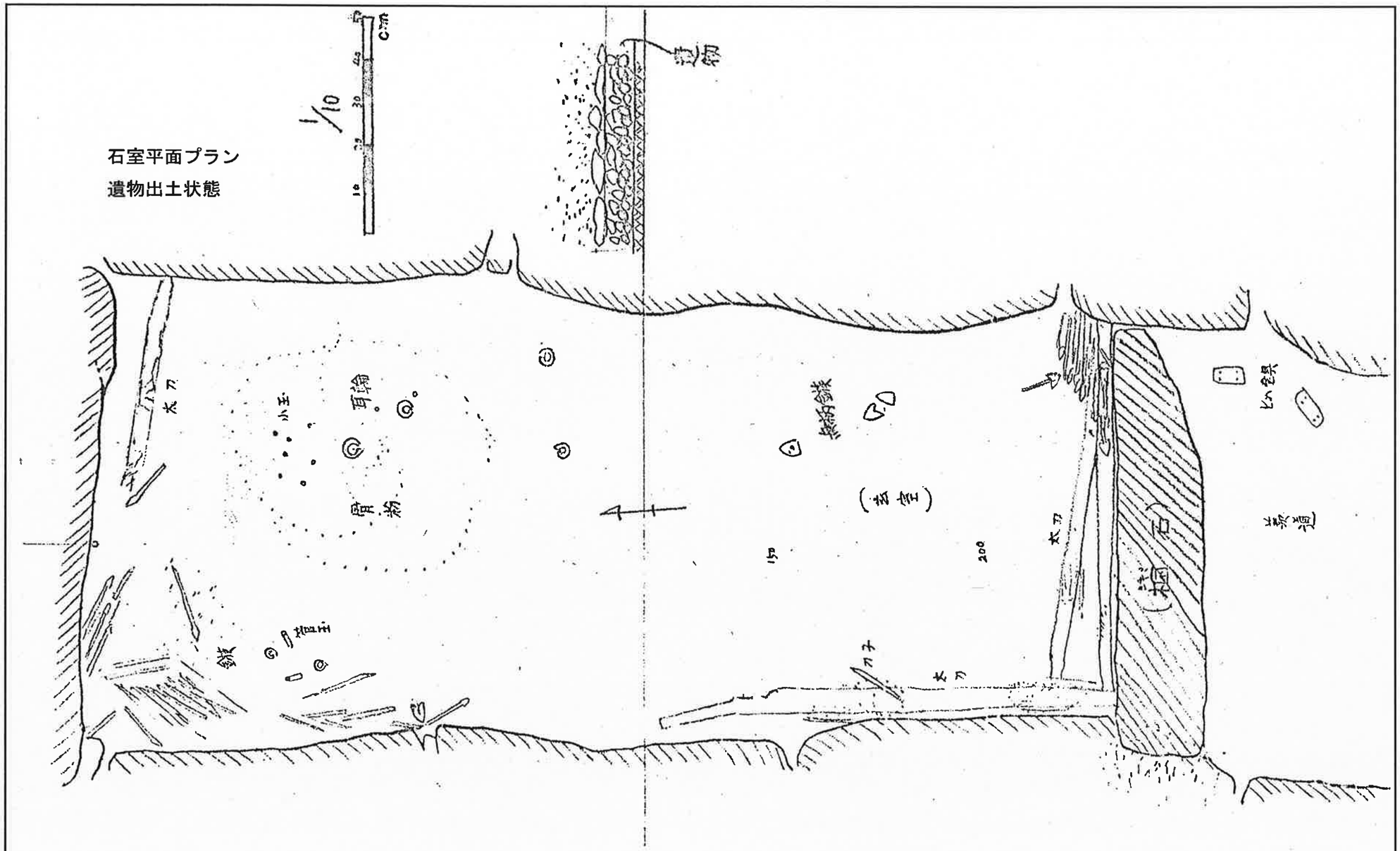
なお封土中よりの軽石（火山灰土）遺物の調査等により、研究を要する。

なお専門家の再研究をまって本来の報告といたしたい。

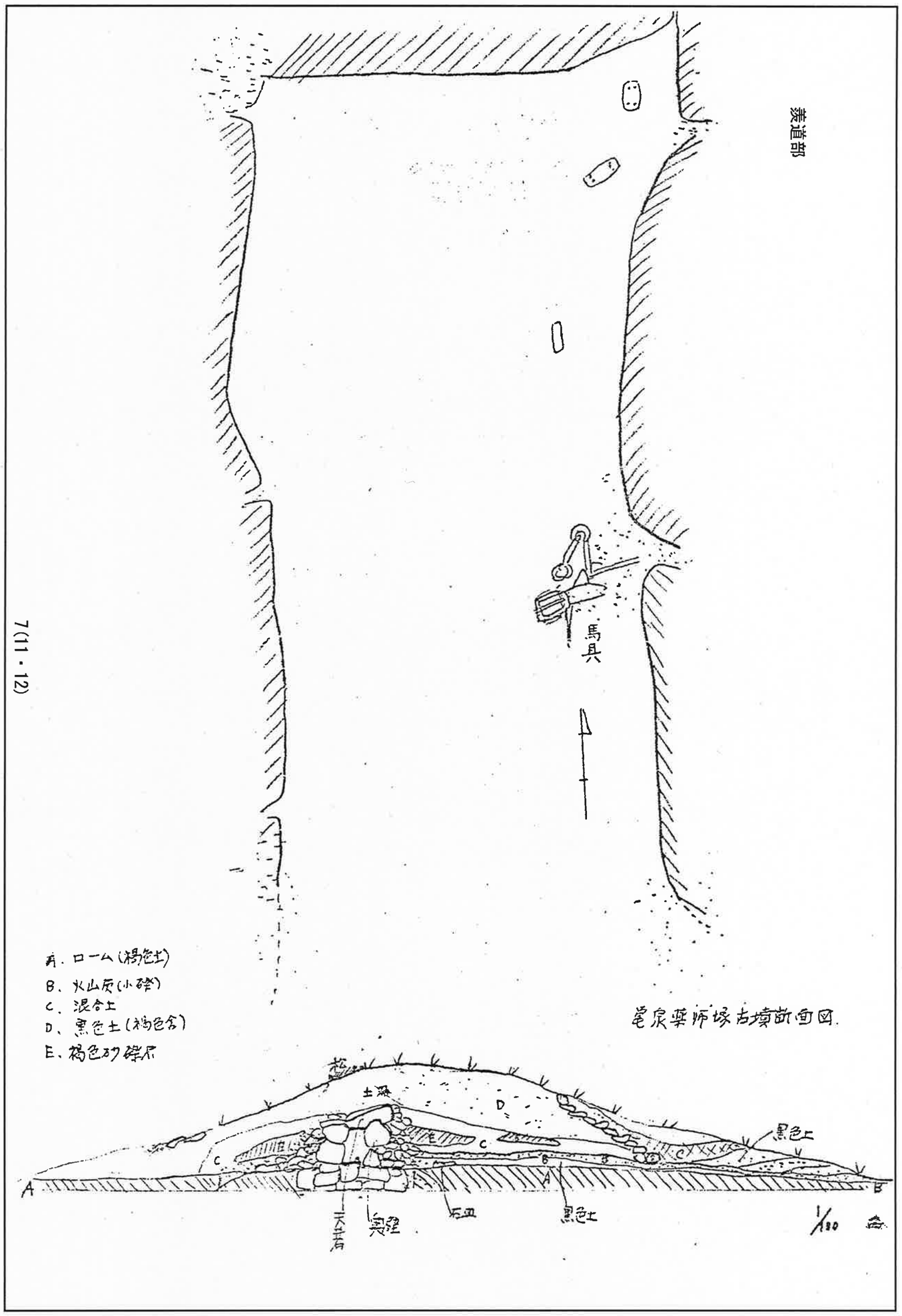
前橋市亀泉町地内薬師塚古墳墳丘実測図

土地改良課





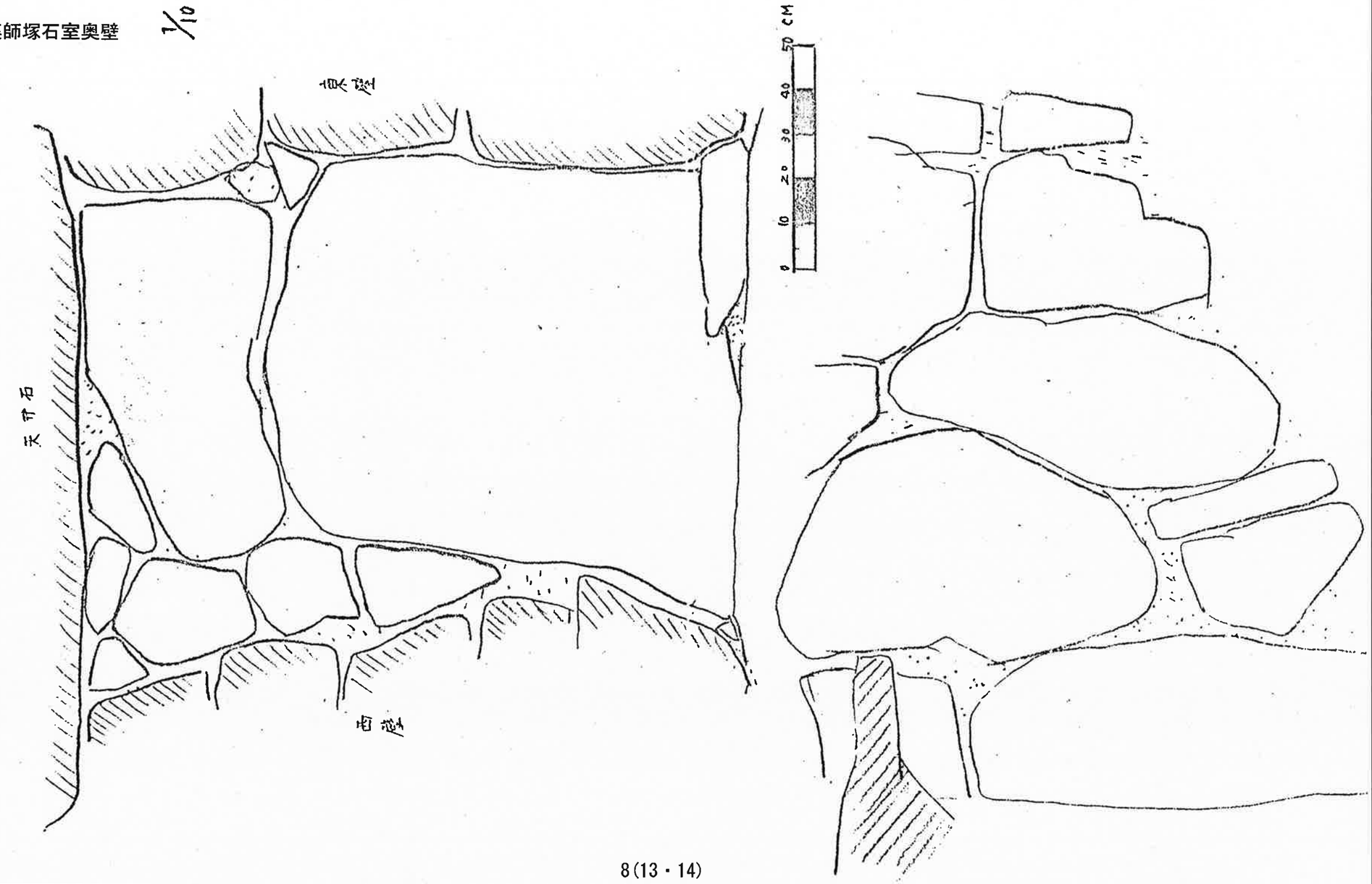
6(9・10)



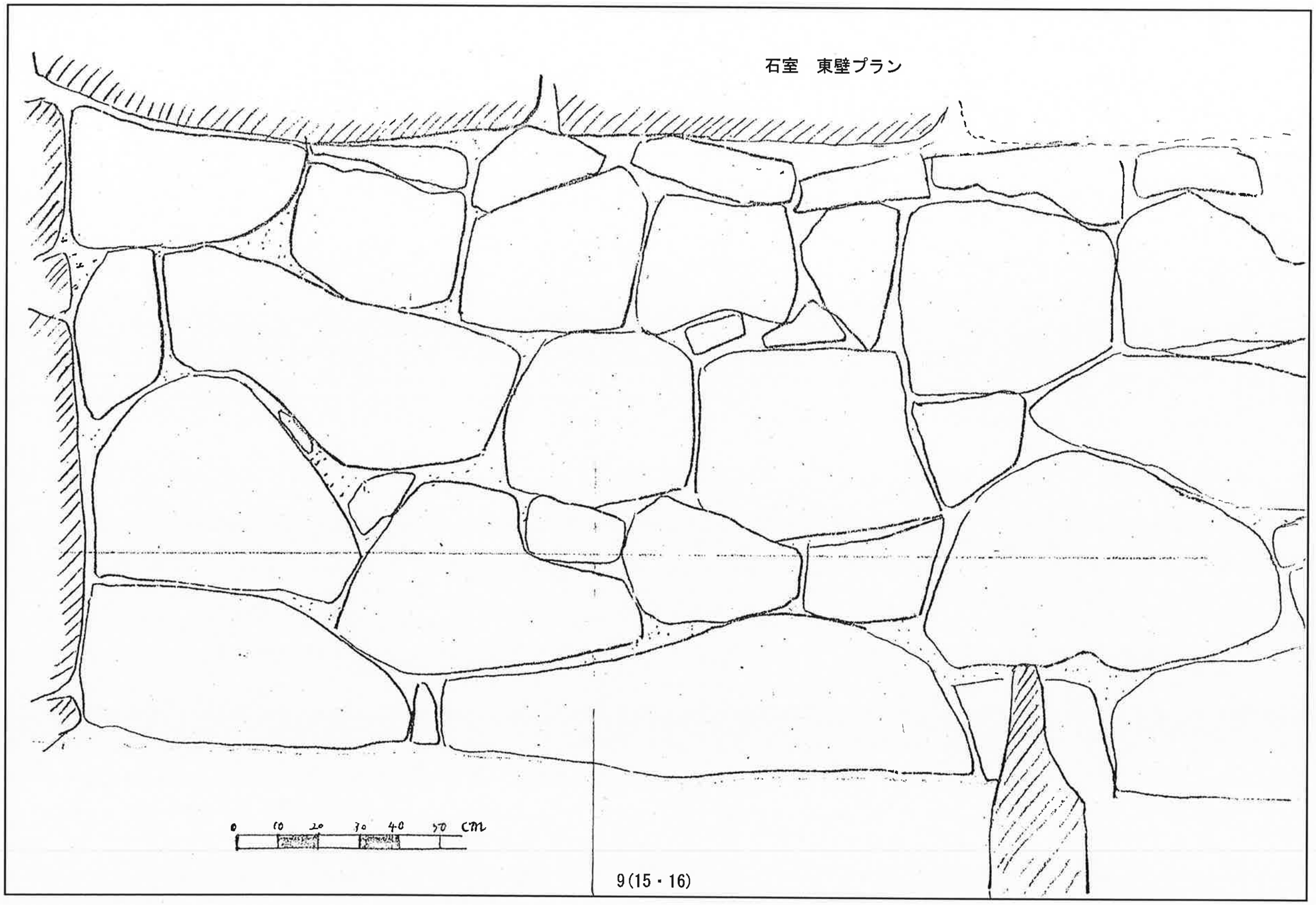
菱原薬師塚古墳断面図

7(11・12)

薬師塚石室奥壁 1/10



8(13・14)


石室　東壁プラン
0 10 20 30 40 50 cm
9(15・16)